

大嘗祭・神今食の祭神

森田 悌

昨年(平成二年)秋賛否両論が喧しく出される中で、一代一度の行事たる大嘗祭が挙行された。この祭礼の理解については、マトコオフスマの秘儀をとく折口信夫説から豊穰感謝を旨とする農耕儀礼に由来するとみる所見までいくつかの学説があり、神事の場における祭神についても所論は定っていない。この問題は天皇の執行する神事の本質に関わり、天皇制理解の立場から興味深い問題であり、学校教育における社会科からみても看過できないテーマである。小文では、古代史の分野から大嘗神事の際の祭神の問題をとりあげ、論じてみたいと思う。

(一)

古代宮廷における最重要神事として一代一度の大嘗祭があり、これを小規模にした恒例の行事に六月・十二月の十一日に挙行される月次祭と十一月下卯日に執行される新嘗祭がある。神祇令では恒例の新嘗祭を大嘗祭と称しており、用語に紛わしいところがあるが、天皇の実修する嘗祭という意味で大の文字を冠し、大嘗祭といっているのである。『延喜式』では一代一度の大嘗祭と新嘗祭とを、はっきりと区別している。『続日本紀』でも一代一度の嘗祭を大嘗祭とし、天平勝宝八歳十一月丁卯紀に「神祇抵官記、是年於神祇
官曹司行新嘗会之事」とあるから、八世紀の段階から、一代一度の大嘗祭と恒例の新嘗祭とを区別していたとみてよさそうである。大嘗・新嘗・月次祭は天皇が神に膳をすすめ自からも箸をつけることを内容とする行事とされ、卑見でもその様に考えているが⁽¹⁾、神事の場に迎えられるのが如何なる神であ

るか、論者により見解が岐れている⁽²⁾。祭神の問題は祭礼の性格に関わることであり、以下小稿で検討してみたいと思う。

先般行われた平成天皇が執行した大嘗祭の祭神は、宮内庁の公式見解によればアマテラス大神とされ、室町時代的一条兼良も、

まさしく天照おほん神をおろし奉りて、天子みづから神食をすすめ申さるる事なれば、一代一度の重事これにすぐべからず、

と述べており⁽³⁾、アマテラス大神であることに疑問の余地はないかの如くであるが、中世以降の文献にアマテラス大神祭神説を頻見するものの、律令時代のあり方については明示する史料を欠き、右所見が古代においても該当するとは直ちには云えないのである。大嘗祭に關し史料を博搜し大著『踐祚大嘗祭』を著した田中初夫氏が「主神はいかなる神であろうか。この神名をそれと指して明らかに記した古いものはない」と述べているところであり、氏は『後鳥羽院宸記』建暦二年十月二十五日条の記事、

公家於悠紀主基殿、可被行請申詞、一昨日廿三日教申之、此事最秘藏事也、代々此事不載諸家記、又無知人坎、殊秘藏事也、其詞云、坐伊勢五十鈴河上天照大神、又天神地祇諸神明白、朕因皇神之広護、國中平安、年穀豐稔覆寿上下、救濟諸民、仍奉供今年新所得新飯如此、又於朕躬、攘除可犯諸災難於末萌、不祥惡事遂莫犯来、又於高山深谷所々辻々大海小川夕厭祭者、皆尽鎖滅而已、是尤秘事也、朕宇八只次第書様也、実祈請時八可為実名者也、

に注目し、アマテラス大神を対象とする親告祝詞が後鳥羽院の時代をさ程遡らない頃になると推察し、アマテラス大神を祭神としてはつきりと認識するようになったのは平安末の頃からであると論じている。田中氏によれば、延喜神祇式の大嘗祭祝詞に「高天原ニ神留り坐ス、皇陸神漏伎、神漏弥ノ命以チテ、天社国社ト敷キ坐セル皇神等ノ前ニ白サク、今年ノ十一月ノ中ノ卯日ニ、天ツ御食ノ長御食ノ遠御食ト、皇孫命ノ大嘗聞シ食サン為ノ故ニ、皇神等、相ヒ宇豆乃比奉」とあり、^{皇神}神たちの前に親告するという式制詞辭の影響をうけて、皇祖神たるアマテラス大神が祭神とされるようになったのであろうと考えている如くである。

但し八世紀律令制下における大嘗祭の祭神がアマテラス大神であったとする有力な学説も行われており、岡田莊司氏は神事の場における天皇着座の方向性が鍵になると論じ、『新儀式』逸文神今食条に「向東着御」とあることより、天皇が第一神座に背を向け東方¹伊勢の地に向つて神迎えを行つていと解釈されるので、伊勢に鎮座するアマテラス大神を祭神としていと解される、と主張している⁽⁴⁾。平安期の史料によると天皇が東南の方向に着御する例が見出されるようになるが、それは京が奈良から平安へ遷つたことによるといふ。更に律令制下の大嘗祭が整備されたと考えられる天武朝の頃は、壬申の乱の勝利がアマテラス大神の加護によりもたらされたという意識が強く、それへの崇敬がたかまっていたので、大嘗祭の祭神は当初よりアマテラス大神で一貫していたとしてよいと述べている。八世紀段階の祭神ではないが、平安末期より遡る平安中期においてアマテラス大神が奉祀対象とされていたという理解が小松馨氏によりなされている⁽⁵⁾。氏説の主たる根拠は『村上天皇御記』応和二年六月十一日条ないし十一月十三日条で、月次祭神今食と新嘗祭の神事に当り天皇が南殿で伊勢大神宮を御拝していることを指摘している。また氏は『貞信公記』天慶二年十二月十一日条に依り、神今食に際し藤原忠平らが損年のことを大神宮に祈申していることに注目し、この祈申が神今食中のものである

ことではないかと考え、神今食が神宮関係祭祀として了解されていたことを示すと説いている。

史的考察よりアマテラス大神祭神説を導いている岡田氏や小松氏の所見と異り真弓常忠氏は、記紀の神話伝承を根拠に、

皇御孫命に直接「斎庭の穂」を授けられたのは天照大神とするのが『記』『紀』の所伝であるとするならば、これと照応する大嘗祭の祭神は天照大神としなければなるまい。

と述べ、アマテラス大神祭神説を展開している⁽⁶⁾。氏説は「大嘗祭に於ける原初の祭神は、ホノニギノミコトすなわち新しく稔つた稲穂そのものであったとしなくてはならない」とする三品彰英氏の所見を承け⁽⁷⁾、整備された宮廷祭祀としての大嘗祭においては神話伝承を背景にアマテラス大神が祭神とされていたと考えたのである。尤も嘗祭が稲穂・稲魂を祀ることに始まると考える所見に立ちつつ松前建氏は、斎田のそばに八神殿が設けられ御膳八神が奉斎されることや在京の斎場においても八神殿が作られていることを根拠に、御膳八神が祭神であつたと論じている⁽⁸⁾。云うまでもなく大嘗祭の時の八神とは^{ミコトシノカミ}御歳神・^{タカミムスヒノカミ}高御魂神・^{ニハタカヒノカミ}庭高日神・^{オホミケノカミ}大御食神・^{オホミヤメノカミ}大宮女神・^{コトシロシノカミ}事代主神・^{アスハノカミ}阿須波神・^{ハヒノカミ}波比岐神らで、宮中の御膳に関わる神である。この八神が大嘗祭の祭神であつたとする所見は、三品氏の著書中にみえ、川出清彦氏も説いている。

以上より律令制当初の大嘗祭の祭神を明示する史料を欠くなかで、アマテラス大神説ないし御膳八神説が主張されているのだが、アマテラス大神説を説いた岡田莊司氏説について云えば、天武朝における伊勢大神宮尊崇の風潮は状況的と云わざるを得ず、右説の根拠とするには不十分であり、神殿内における天皇着御の方向性も、東・東南¹伊勢の方角を向っていることを直ちにアマテラス大神奉迎に結びつけ得るか、疑問の余地があるように思われる。岡田氏の説く如く春日社の場合に祭祀の方向性が重視されているにしても、遙拝ということが考えられてもよいのではあるまいか。東の方を向きその先に鎮座す

る神を奉拝すること、奉迎ということとは相異している。私も天皇の東方を向いての着御に関しては十分な理由を見出し得ず、伊勢神宮が意識されていたとする限りで岡田氏の所見に従ってよいように思う。或いは伊勢神宮と特定せずとも、東君・東皇は恵みをもたらす日や春の神をさし、東作といえは春耕ないし農作の義となり、東は多分に農事に関わる方向であるから、農耕儀礼に始まることに疑いのない嘗祭において天皇が東方を向くことに不思議はないと考える。私は、天皇が神殿へ入る以前の段階で既に神座の側に御杵が置かれているところをみると、神の方が先に入御しているのではないかと考える。新嘗祭や神今食の次第を追究しても、神殿へ入った天皇が神を奉迎することを思わせる行動をしていないようであり、既に神殿内に居る神に神膳を供することを内容としていられるのである。私は天皇の向東着御については、伊勢神宮の遙拝ないし東方の重視に由来する以上でなく、奉迎のためとするのは当たらないと思う。小松氏の注目する平安中期における神事の際の伊勢神宮の御拝ないし祈申は、祭礼の場における奉迎や供膳とは一応無関係であり、祭神如何に関わっているとは解し難いではあるまいか。アマテラス大神の御拝ないし祈申は朝廷による伊勢神宮重視の姿勢を示すと云ってよいが、そのことと大嘗祭の時の祭神とは自と別のことであろう。抑々恒例の予祝ないし豊稷感謝に関わる行事である月次祭神今食の場で、当年の損について祈申するというようなことは考え難いことである。神今食の時の称辞は『延喜式』祝詞にみる如く、型通りのものとして決っているのである。

神話伝承を背景にアマテラス大神が祭神であつたとする真弓氏説に關しては、その性格上積極的に否定するのは困難であるが、大嘗祭の次第について古儀をかなり詳細に伝えていると思われる『儀式』（『貞観儀式』）の踐作大嘗祭儀条においてアマテラス大神に言及していないのであるから、依るべき説とするには困難が伴うように思う。神話の世界のことで云えば、『日本書紀』神代本文に、

（スサノヲ命ハ）復見天照大神当新嘗時、則陰屎於新宮、

一書云に、

及至日神当新嘗之時、素戔鳴尊、則於新宮御席之下、陰自送糞、
『古事記』上巻に、

（スサノヲノ命）^{アマテラス大神}その大嘗を聞こしめす殿に屎まり散らしき、

とある如く、アマテラス大神自身が新嘗を執行する主体であり、神事の場合へ奉迎される存在ではないのである。神話の世界のあり方に照らしあわせても私は、アマテラス大神が祭神になることはあり得ないことと思う。アマテラス大神は穀霊や食物生成に関わる神ではないのであるから、予祝や豊稷感謝の神事の祭神としては不適格であると考え。御膳八神を祭神と解するのは、斎田や京内斎場に設けられる八神殿を念頭におくと説得的なところがあるが、真弓氏が批判する如く御膳八神が奉斎されるのは斎田と斎場に限られ、大嘗宮に祭られた形跡はないのであるから、矢張り祭神であつたとするのは難しい。御膳八神は宮中の御膳に関わる神として、斎田設定に始まる大嘗祭の行事を守護することを期待され、八神殿に祀られているのであろう。

以上大嘗祭の時の祭神に関する先学の研究を検討してきたが、中世以来通念化しているアマテラス大神説を古代律令時代にまで遡って検証するのは困難なようであり、それと異なる別の神を想定する必要があるように思われる。

(二)

前節で神話にみえるアマテラス大神の執行する新嘗に言及したが、先引『日本書紀』の文章には新宮とあるから、神事のために新たに宮を作り嘗を行つたらしい。これは大嘗祭の時に大嘗宮を作ることに通じている、とみてよいだろう。アマテラス大神は天狹田・長田を御田としていたというから、そこからの収穫をもって新嘗を行つたと考えられる⁽⁹⁾。ここでアマテラス大神が行つた新嘗の内容が問題になるが、稲や食物生成に関わる神が関係していたことと思う。『日本書紀』神代一書云の伝承によれば、イザナキ、イザナミの生んだカグツ

チとハニヤマ姫の間に生まれたワクムスビが蚕と桑および五穀を生じたとあり、別な一書では父に斬られたカグツチの血から食稻魂^{ウカノミタマ}が生れたと伝えている。名称からみてワクムスビは生成の神であり、ウカノミタマは穀霊^{コーン・スピリット}の謂であらう。更に別な一書では、葦原中国に保食神^{ウケモチノカミ}がいることを聞いたアマテラス大神が弟のツクヨミノ命に行きてみよと命じたところ、降下した命はウケモチノカミが口より食物を出して饗したので怒り、穢しいとして剣で撃ち殺し復命した伝承を記している。アマテラス大神はツクヨミノ命の行為を怒り、更めて天熊人^{アマノクマ}を遣わし、ウケモチノカミの死体から生じた牛馬や粟・稗・稲・麦・大小豆をもち返らせ、これらは蒼生の食活するものであると云って喜び、稲種子を天狭田・長田に植えたという。神代紀の本文には穀物神のことは見えないが、右所伝より高天原においても穀霊神や食物神の活躍が推察され、アマテラス大神の田である天狭田・長田における耕官においても穀霊神・食物神の働きにより収穫がなされていたと考えられていたとみてよい。アマテラス大神の新嘗は、かかる穀霊神、食物神への感謝をこめたものであらう。これらの神は所伝によれば具体的な名称をもち、神統譜上に一定の位置を占めているが、生成・稲魂ないし食物そのものの自体を名としている。元来は稲や食物そのものをさし、転じてそこに宿る神霊を意味するようになっていいると考えられ、やがて神統譜に位置づけられるようになっていいるのである。アマテラス大神は云うまでもなく皇祖神にして日の神であり、恵みをもたらす神格ではあるが、稲に宿る霊や食物を幸る神ではなく、生育や豊穡をもたらすのはムスビノカミないしウカノミタマである。天狭田・長田を営田したアマテラス大神もそれらの神霊に奉謝するため、新嘗を執行しているのである。

尤も高天原におけるアマテラス大神による新嘗が生育や豊穡をもたらす神霊への奉謝とはいっても、具体的にムスビノカミとかウカノミタマの如き神名があげられていない。稲そのものに密着した稲魂の如

きが祭られているのであって、神統譜上に位置づけられる神格以前の神霊を想定できそうである。

さて大嘗祭に関連する嘗の行事として神嘗祭と相嘗祭がある。前者は九月に伊勢で舉行され、後者は十一月上卯日に畿内を中心とした地域の有力社において行われる祭祀である。神嘗祭は内宮と外宮の行事からなり、朝廷から幣帛使が遣わされ幣帛賜給に与かつたのち九月十五日に神官らが外宮において亥時から丑時にかけて二度の御饌を供し、十七日に内宮で同様に二度の供饌を行うことになっている。供饌の時刻は大嘗祭の場合とはほぼ同じであり、二度の供饌もそれに一致している。外宮の儀はトヨウケノ神を対象とし、内宮のそれはアマテラス大神に捧げられるのであるが、内宮の儀の時の祝詞が『延喜式』に見えているので、引用すると次の通りである。

度会^乃宇治^能五十鈴^乃川^上大宮柱太敷立^氏高天原^尔千木高知^天称辞
意奉^留天照坐皇大神^乃大前^尔申進^留天津祝詞^乃太祝詞^平神主部物忌
等諸聞食^止宣^能称^内唯^唯

天皇^我御命^尔坐御寿^乎手長^乃御寿^止湯津如磐堅磐^尔伊賀志御世^尔幸^聞
給^比阿礼坐皇子等^乎惠給^比百官人等天下四方国^乃百姓^尔至万長平^久護
惠^美幸給^止三郡国国处处寄奉^礼神戶人等^常進^能由紀^能御酒御賢
税千税余五百税^乎如横山^久置足成^天大中臣太玉串^乎隱侍^天今年九月
十七日朝日豊采登^尔天津祝詞^乃太祝詞辞^乎称申事^平神主部物忌等諸
聞食^止宣^能称^内唯^唯

天皇の長寿や皇子・百官人・百姓らの平安ならびに五穀豊穡を祝い、神郡や処々の神戸らの調進物を供えてお祭り申し上げるの意で、定期的に秋の終りに当り、新穀を嘗す儀礼である。『延喜式』には内宮の場合の祝詞しかとられておらず、「豊受宮准此」という文言がないので、外宮供饌の時の祝詞は多少とも右引文と相異していたらしい。

既述した如くアマテラス大神は高天原で新嘗の神事を行っていたのであるが、同様の儀を伊勢神宮で行い、又アマテラス大神に奉仕するトヨウケノ神をまつる外宮でも行ったのである。右引祝詞によれば、

伊勢国神郡や処々の神戸らの供進物を奉ることになっており、『皇大神宮儀式帳』や『止由気宮儀式帳』の記述に当たると浄米で作った御膳を差上げることになっている。高天原におけるアマテラス大神の天狭田・長田に当る田が神郡の御田に当るのである。神嘗祭においてアマテラス大神は神領でとれた当年の新穀を食し、豊穰や平安をお祭りしたのである。

九月の伊勢における神嘗祭の後、十一月上卯日に相嘗祭が諸社で執行されることになっている。相嘗祭の義に關し佐伯有義氏の解釈があり、

相嘗祭は^(新嘗)大新嘗に先だち、^(神嘗)神新嘗に次ぎて七十一座の神々に新嘗を奉らしめ給ふので、七十一座の神等が相共に新嘗を開食す故に相新嘗と申すので、それを略して相嘗と称へるやうになったのであろう。

と説明されている⁽¹⁾。相嘗祭に預かる七十一座とは朝廷からの幣帛賜給の対象になる神社の謂で、これらの神社では十一月中卯日に神膳を供すことを行い、その時朝廷の幣帛が下賜されるという意味である。当然のことながら、神嘗祭を九月におえている伊勢神宮は相嘗の幣帛に与かることはない。既述した如く、伊勢神宮は神嘗祭の時に幣帛を賜っているのである。延暦九年九月甲戌紀に、

奉伊勢太神宮相嘗幣帛、(下略)

とみえている。定期的にみて神嘗祭の幣帛奉進に関する記事であるが、神嘗の幣帛を相嘗幣帛と称しているのを見ると、神嘗祭も相嘗祭と同様の祭礼と見做されていたようである。神祇令において神嘗祭は九月、相嘗祭は十一月上卯日と定まっているので、両者が混同されることはあり得ないが、諸神が相共に嘗の祭礼を行うという点で神嘗祭も相嘗祭の中に包含されることがあったのであろう。諸神の相嘗の次第に關しては神嘗祭の場合の如く祝詞が知られず、『皇大神宮儀式帳』や『止由気宮儀式帳』の如き文献が遺っていないので、よく判らないが、神社を奉斎する人たちが調進した御饌を神へ供すことを行ったのであろう

と思われる。朝廷からの相嘗幣帛賜給は諸神の嘗祭を祝つての奉進である。

神嘗・相嘗はアマテラス大神ないし諸神の嘗祭であり、これらにつづく大嘗・新嘗祭は嘗祭の締めくくりに性格をもち、それらの延長線上で天皇が全国からの供進物を神に捧げ、嘗の神事を行う次第と云えそうである。かかる観点からすれば、大嘗祭の時点において既にアマテラス大神は嘗の祭りを終えているのであるから、更めてここで嘗の祭りに参加することはないだろうと考えられる。神嘗祭が伊勢国神郡や神戸の供進物を奉獻され、相嘗祭では諸神の配下の神田や神戸の供進をうけるのに准じ、大嘗祭においては全国を支配する朝廷の嘗祭のこと故東西に設定された悠紀・主基田の収穫により執行されているのである。

尤も大嘗祭を秋収に結びつけることに否定的な所見もある。谷川健一氏は神嘗祭や相嘗祭を初穂儀礼ないし収穫祭に結びつけ得るにしても、十一月下卯日に挙行される大嘗祭は冬の行事であり、冬至と関連づけて理解すべきであると論じている⁽²⁾。氏は大嘗祭にマトコオフスマの秘儀なるものを想定し、人間の魂が最も衰える冬至の時期にタマフリの行事を行い、復活を図ったと考えている。大嘗祭の時の神殿の中に置かれたマトコオフスマに秘儀めいたものはなく、単に迎えられた神が寝むに過ぎず、谷川氏の解釈の前提が失当と云わざるを得ず、タマフリの要素を見出すことは困難である⁽³⁾。農事暦からすると十一月下卯日は太陽暦の十二月中旬前後となり、かなり冬も深まった時点となるが、田令田租条では、

凡田租、准国土収獲早晚、九月中旬起輸、十一月卅日以前納畢、其春米運京者、正月起運、八月卅日以前納畢、

と規定しており、田租の納入期限を十一月末日としているのであるから、その頃まで秋収関連作業が続いていることを予想させるのである。右引条の『令集解』釈は「九月為早、十一月為晩也」とし、同文の注釈を義解も行っている。右引注釈文によれば、晩稻の収穫は十一月に

入って行われていたのである。昨今の稲作りは全般に早生の傾向を強めており、秋半ばには農納めとなつて多いことが多いが、狭い私の体験でも昭和三十年代頃まで十二月に入り猶、俵づめの作業を行っていた記憶がある。谷川氏の理解する農事暦は、現今の風潮のそれに適っているにしても、伝統的なあり方と少し相異しているようである。私は、十一月下卯日の大嘗祭・新嘗祭を刈上げ祭の要素を有する祭礼とみて、何ら不都合はないと考える。旧稿で私は、能登における十一月の「アエノコト」を新嘗祭に当たるとみ、豊稔感謝を含意すると解し、十二月の月次祭が正月の「アエノコト」に相当する祈年・予祝の行事と考えたことがあるが⁴⁰、近年の農事暦とは多少齟齬しているかの如き感を与えるにしても、往時のあり方を考えると不自然ではないのである。冬に入っても農事はつづき、他方冬の最中に春耕の準備が始るのである。

以上本節では、神嘗祭↓相嘗祭とつづく嘗の祭りの中へ大嘗祭・新嘗祭が位置づけられることを考えてみた。このことは、大嘗祭・新嘗祭の主神がアマテラス大神でないことを示唆している。繰返すことであるが、九月段階においてアマテラス大神は嘗の行事を終えているのである。

(三)

それでは大嘗祭の祭神は何であろうか。行事の守護に当ると思われる御膳八神については『延喜式』踐祚大嘗祭条に齋院における祭神八座として神名が明記され、『儀式』に齋院の様子が詳細に規定されているが、天皇が嘗を行う神殿内に迎えられる神に詳細に規定されているが、天皇が嘗を行う神殿内に迎えられる神に詳細に規定されている一言も触れていない。この事実は、神殿内に奉迎されている神が神統譜上に位置づけられている名ある神でなく、素朴な穀霊の如きであったことによるのではあるまいか。

屢々引用される『令義解』の大嘗(新嘗)を説明する注釈文に、
嘗新穀以祭神祇也、朝諸神之相嘗祭、夕者供新穀於至尊也、

がある。相嘗祭は十一月上卯と法定されているのであるから、新嘗の日に相嘗を行うという注釈は少なからず奇異で、恐らく新嘗祭の日の朝に行われる諸社への班幣を指して相嘗と云っているらしい。因みに『令義解』の書入に「問、嘗新穀行事、答、細旨可別式、問、義云、朝相嘗祭者、然則上下卯日相嘗、並無別哉、答、上卯日所司所行也、下卯為以新穀供至尊所祭耳」とあり、神祇令の相嘗と義解の云う下卯のそれとの相異を問題にしているが、上卯相嘗に関し適格な説明をしているものの、下卯相嘗については明解をなしていない。ところで右引義解の後半部は新穀を至尊に差上げるの謂であるが、至尊を天皇と解すかアマテラス大神とするかで論が岐れている⁴¹。アマテラス大神祭神説に立つ論者により至尊アマテラス大神が説かれているが、公式令平出条・関字条の至尊は天皇をさしていることが明らかであり、律令用語としての至尊は天皇を指すと解釈しなければならぬだろう。即ち『令義解』の注釈者は新嘗の神事を、天皇に対する供進と理解していたことを示している。ここでは神殿内へ奉迎された神への供進という理解はされていないのであるが、祭神が名ある神ではないので義解注釈者の注目するところとならず、聖饗当事者である神と天皇のうち後者のみ挙げられているのではあるまいか。先にみた如く義解は相嘗と諸神への班幣を混同しており、祭祀について正確な理解をしていたとは云い難いところがあるが、祭神がアマテラス大神であったならば、その神名に触れなかったはずはないように思われる。

月次祭に相当する民間の祭祀として宅神祭がある。貞観八年正月二十三日官符⁴²に、

諸家諸人至于六月十二月必有祓除神宴事、茲歌醉舞、欲悅神靈、とある神事が宅神祭のあり方を示しているのであるが、右引文では奉斎される神を神靈とのみしか云っておらず、名ある神を祀っていると解し難いだろう。更に民間の新嘗に関わるとして頻引される『万葉集』歌⁴³、

鳴鳥の葛飾早稲を饗すとも、その愛しきを外に立てめやも

誰ぞこの屋の戸押そぶる新嘗に、わが天を遣りて斎ふこの戸をより窺知される、家刀自により奉斎されている神が然るべき名ある神と思われず、田の神の如きと推考される。民間のあり方から宮廷祭祀のあり方を推論するのは方法的に問題があるにしても、大嘗宮の祭神が名ある神ではないということの傍証となろう。私は、大嘗宮の祭神は名ある神でなく、稲の育成や豊稷に力のあつた稻魂の如き神靈であつたと考えるのである。

神殿へ奉迎された神には神膳が供されるだけでなく、寝所や亀服の準備がなされている。仮にアマテラス大神が祭神として迎えられたとしても右の様な設営があつて不思議でないが、自からの神殿をもち奉斎する神官や神戸の民をもつ神よりも、それらをもたない稻魂や田の神の如き然るべき名をもたない神靈の方がより相応しい様に思われる。

ところで神今食や新嘗の時、迎えらるる神は二度の供膳に与かるとされるのだが、一代一度の大嘗祭では悠紀・主基二殿が作られ、宮を異にして二度神事が行われている。私は、この二殿に関し旧稿で迎えらるる神が一人でなく二人なので各別の宮が作られているのだ、と考えたことがある⁽⁴⁾。一人の神に対し二度の連続した供膳を行うため二の宮殿を作るということは、少なからず奇妙ではないかということが根拠である。二人の神に対しそれぞれの宮を作り寝所を設けるのであるならば理解可能であるが、一人の神に二の神殿・寝所を設営するということは、不自然と云わざるを得ないだろう。先に少し触れた能登の豊稷と予祝の祭りであるアエノコトでは男女一対の田の神を迎え入浴・供膳を行うのであるが、私は、大嘗祭の祭神も二人の神を迎え供膳を行っていると思得るのではないかと考える。悠紀・主基の二殿はそれぞれの神のための神殿で、天皇は二人の神に対し各別の供膳を行っている、と解するのである。私は、二度の供膳なるものも、一人の神に対しなされたいとすると、連続した行事となっているので不自然という印象を免れ難いように思う。第一の神膳が亥一刻に始まり、

同四刻に終了すると、子一刻に次の膳の準備が始まり、寅一刻に供膳の儀が開始されているのである。一の神に対する二度の供膳であるならば、かなり間を置いて行う方が自然ではあるまいか。二度の供膳のあり方からみても私は、二人の神を奉迎し神事がなされているとみるべきだと思う。或いはアエノコトの場合から類推するならば、悠紀・主基に迎えらるる神は一対の男神・女神なのではあるまいか。

尤も右の様に考えると、恒例の新嘗祭や月次祭神今食では一の神殿しか設置されず、寝所も一つしかしらえていないので、皇室嘗祭の祭神は一人であるという反論が可能である。この点について私は、新嘗祭や神今食は一代一度の大嘗祭に比べるならば略式となっているので、二の神殿を設けることをせず寝所も一つしか設営されていないのだと考える。二度の供膳のあり方は大嘗祭の時に全く一致しているのであつて、一の神に対する供膳とみると何といつても不自然なのである。寝所が一つしか設けられないのは、奉迎された神に寝んでいただくということを象徴的に示せば足るということと、敢えて二つのしつらいをせず一のそれで済ますことにしていると解し得るように思う。

伊勢における神嘗の祭儀については『皇大神宮儀式帳』や『止由気宮儀式帳』に記載がみえ、六月・十一月の月次祭に関しても両書に次第が記されている。いずれも亥時に始まり丑時に至る間に二度の御食を奉つており、それを朝御饌・夕御饌と称している。儀式帳から窺知される祭儀はアマテラス大神ないしトヨウケノ神に対し供膳を行う儀となつているが、元来はアマテラス大神ないしトヨウケノ神が豊稷に関わる神靈を奉迎し聖餐を行うことを旨とする儀礼だったのであるまいか。神代紀に見えるアマテラス大神の新嘗について私は、収穫に力のある神を迎え嘗を行っていると推測したが、かかるあり方が伊勢の神嘗・月次祭の原型だったのであろう。伊勢の神嘗・月次祭における二度の供膳も、二人の神が迎えられているので亥から丑時という間を置かずなされているのだと考える。因みに朝廷の二度の供膳は亥時に始まり寅刻に終わるが、伊勢では亥より丑までとなっている。朝廷

の祭儀ほど大がかりでないので時間が短縮されているのかも知れないが、アマテラス大神やトヨウケノ神が亥より丑までの間という真夜中の間に二度の御饗を食すというのは、どうみても不自然である。アマテラス大神が二人の神霊に供膳を行う儀が原型としてあり、それが変じてアマテラス大神への二度の供膳となっているのであろう。

以上小稿では大嘗祭の祭神に関し通説化しているアマテラス大神を律令時代まで遡らせることは困難であることを述べ、豊穰に関わる神が迎えられていることと、一対の神からなっているのではないかと考えてみた。旧稿で述べたことであるが、朝廷で執行される嘗の行事に伴う諸神への班幣は甚だ政治的意味あいを濃厚にしている⁽⁹⁾が、嘗自体は頗る伝統的であり、農耕儀礼としての要素を遺しているようである。律令時代に入ればさまざまな神霊は然るべき名前を与えられ、神統譜上に一定の位置を占めるようになるのだが、嘗の祭礼の時奉迎される祭神に関しては名が与えられていなかった。このことは嘗の儀が、それだけ古儀を伝えていると解釈される。万葉集から窺知される東国の新嘗は家刀自が奉斎していたことを示し、元來の嘗祭は女が当っていたらしいことを思わせるのに対し、朝廷のそれは女帝に限らず男帝が行っており、本来のあり方からの乖離を示しているようである⁽¹⁰⁾が、朝廷の最重要神事として祭神、またそれへの供膳のあり方となると、古儀を遺しているのである。皇室の存続を根拠づける最大の理由が豊穰をもたらすことにあり、それに関わる祭儀では古儀継承が何よりも重視されたのであろう。

- (1) 拙稿「大嘗祭・神今食の本義」(『論争日本古代史』所収)。
- (2) 諸学説については田中初夫『踐祚大嘗祭』参照。また真弓常忠『日本古代祭祀の研究』「大嘗祭の祭神」参照。
- (3) 一条兼長『代始和抄』。
- (4) 岡田花司『大嘗の祭り』。
- (5) 小松馨「神宮祭祀と天皇祭祀——神宮三節祭由貴大御饗神事と神今食・新

嘗祭の祭祀構造」(『国学院雑誌』九一卷七号所収)。

(6) 真弓常忠前掲書。

(7) 三品彰英『古代祭政と穀霊信仰』。

(8) 松前健『古代伝承と宮廷祭祀』「大嘗祭と記紀神話」。

(9) 川出清彦『祭祀概説』。

(10) 天狭田・長田の意味は、高天原にある小規模な田と長大な田の謂で、格別の意味があるわけではない。葦原中国に狭田・長田があるのと同様に、高天原にも狭田・長田があったのである。

(11) 『神道大辞典』「あいにえのまつり」(佐伯有義執筆)。

(12) 谷川健一『大嘗祭の成立』「穂の祝祭」。

(13) 岡田花司前掲書。又前掲拙稿参照。

(14) 拙著『解体期律令政治社会史の研究』「祈年・目次・新嘗祭の考察」。

(15) 『令義解』の文章の解釈に関する諸説については田中初夫前掲書参照。

(16) 『類聚三代格』巻十九。

(17) 『万葉集』三三八六、三四六〇。

(18) 前注(1)拙稿。この拙稿で私は、悠紀を輪饗の謂ではないかと述べてみた。斎饗の意でも通じるが、いずれにしても貴人に差上げる食物のことであろう。

(19) 前流(14)拙稿。

(20) 工藤隆『大嘗祭の起源』。